

[COMMUNION]

WEB:http://www.nskk.org/

tokyo/index.html

E-mail:comm.tko@nsk.org

PHONE:03-3433-0987

FAX:03-3433-8678

Diocese Office

《ペンテコステメッセージ》
見ないのに信じる人は、幸い

(ヨハネ20・29)

司祭 バルナバ関 正勝

ヨハネ福音書はイエスの復活の出来事を伝える記事の中で、イエスの死によって恐れと絶望の淵に立たされた弟子たちの姿を彼らは「ユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。」(ヨハネ・20・19)、と記しています。イエスに出会って当時の社会の価値観と言ったものの束縛から解放され、自由と尊厳を得て生き始めた弟子たちにとってイエスの十字架上の死は、当時のユダヤ社会の—現代社会の現実でもある—強暴なまでの政治的・経済的・宗教的権力に直面させられる出来事に他なりませんでした。彼らは再びイエスを死へと追いやった外の世界を恐れる、小さな集団となつて嵐の過ぎ去るのを待つだけの存在となっていました。「家の戸に鍵をかけていた。」と言う表現が、この希望を失いかけていた弟子たちの姿をよく言い

当てているようです。しかし、イエスはそのような状況にある弟子たちの「真ん中に立ち」「平和があるように」とご自分のからだに残る釘と槍の跡をお見せになりながら、繰り返し励まされます。疑うトマスには「わたしを見たから信じたのか、見ないのに信じる人は、幸いである。」と宣言されます。このようにイエスは希望を失いつつあった彼ら弟子たちの「真ん中に立ち」「彼らに息を吹きかけて：聖霊を受けなさい。」と、新しい使命(ミッション)を託されるのでした。

復活の出来事と聖霊降臨のそれとは分離できないことが示されます。イエスが復活されたという出来事は、彼を葬った墓が「空虚」であったことだけがそのことの証拠ではなくて、むしろ

外の世界を恐れて小さく固まっていた彼ら弟子たちが聖霊の伊吹を受けて、使徒言行録の記事が示すように堂々と「神の偉大な業」を語る者へと変えられていく歩みこそが復活の出来事を証している、と言えましょう。

「見る者」から「神の偉大な業」を「信じる者」へと変える力こそが、聖霊の伊吹の働きに他ならないでありましょう。

ところで、「見る」ことで成り立つ世界(たとえば現代の科学技術文明と言われる世界)は対象(相手)を観察・分析して説明する世界です。対象を部分化・輪切りにして説明します。しかも部分化された対象が、その対象の存在のすべて・全体であると思われ見做します。例外は認めないで、むしろ排除しかねません。「見る・見られる」関係で成り立つ社会の生き難さがあります。イエスの「見えると言いつ張るところに罪がある」(ヨハネ・9・40以下など)との語



ところで、「見る」ことで成り立つ世界(たとえば現代の科学技術文明と言われる世界)は対象(相手)を観察・分析して説明する世界です。対象を部分化・輪切りにして説明します。しかも部分化された対象が、その対象の存在のすべて・全体であると思われ見做します。例外は認めないで、むしろ排除しかねません。「見る・見られる」関係で成り立つ社会の生き難さがあります。イエスの「見えると言いつ張るところに罪がある」(ヨハネ・9・40以下など)との語

り掛けが思い起されます。そしてイエスは「信じるものになる」ことをわたしたちに求められます。信じる者は目の前の見える部分だけでなく、部分に支配されることなく全体に向かつて呼びかけ求めつづけます。信じることはイエスを死へと追いやったからだの傷を見て、なお神の偉大な働きをそこに受け入れることを可能とする(聖霊の)力に他ならないでありましょう。

ナチズムに抵抗し、ヒットラーの命令で死刑となったドイツ人牧師D・ボンヘッファーは一人のフランス人の牧師との対話で、その牧師が「僕は聖人になりたい」と言ったのに対して「僕は信じることを学びたい」と語っています。国家社会主義の嵐が吹き荒ぶただなかで、彼は神の働き・復活を信じる者とされた、と告白します。聖霊の息吹を受けて歩む現代の教会は、神の働きを信じる情熱ある信仰が求められておりましょう。

(東京教区退職司祭)

私たちは忘れない、3・11を ～東京教区の震災支援～

東日本大震災支援対策室より

後藤 務

今後の支援活動について

管区「いっしょに歩こうパートⅡ」のうち「だいに・東北」の活動は、2015年5月をもって区切りがつけられ、日本聖公会東北教区の支援室に引き継がれます。センター新地も閉じられます。一方、管区の「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」は2016年5月まで継続の予定であります。雁小屋仮設における主として原発避難者に対する活動は、このプロジェクトのもとで続けられます。

東京教区は、従来から被災地に対する直接支援を行う「いっしょに歩こう！」を支援してきました。しかし前記のような全体的状況の変化を踏まえ、今後は被災者支援全体に対し、従来とは異なった視点で関わっていく必要があると思われます。これに伴い、支援対策室についても、見直す必要があると思われまます。支援対策室は、震災発生時に常置委員会により設置され、活動してきましたが、前記のような状況を鑑み、2015年5月をもっていったん区切りをつけたいと考えまます。今まで様々な形でご協力いただ

いた各教会連絡員の方々につきましても、あらためて今までのご協力に感謝するとともに同時期で区切りをつけさせていただきますと思います。

2015年6月以降につきましては、管区プロジェクトの継続する2016年5月までは教区としても活動する必要があると思われ、従来とは体制を変え、常置委員会のもとで、有給スタッフ1名とそれに協力する若干名のボランティアにより、教区としての主体的なプログラム(例えば、東京に避難している原発事故被災者との新たな関わり等)を実施していくこととしたいと考えまます。

今後の基金について

当初の教区会決議に基づき、3年間で1億円の目標を掲げ、3年を経過した後も募金を継続してお願いしてきました。その結果、2014年12月末現在の累計で目標を上回る1億2千5百25万4千円の募金を皆さまからいただきました。昨今の教会財政等の厳しい中、これほど大きな支援をいただきました皆様にあらためて心より感謝いたします。この募金につ



津波で横倒しになったビル

きましても、一度、区切りをつけたいと考えています。尚、「東北教区支援室」への献金は、体制が整い次第ご連絡いたします。ただ東京教区独自の活動を継続する限りにおきましては、年間5百万程度の活動資金は今後も必要と思われまます。この先1年間につきましては、現在教区で保有している約5百万円を使うこととしますが、また新たに募金の必要時にはあらためてお願いをしたいと思いまます。これらの今後の事柄につきましましては、6月6日(土)に説明会を開き、ここで今後についての概略報告をさせていたたく予定です。

4年間にわたる皆様の温かいご支援、ご協力に心より感謝を申し上げます。

管区「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」への献金につきましては、次の献金受取口座に指定献金としてお送りいただければ幸いです。

郵便振替 001200-78536 「日本聖公会」(ニッポンセイコウカイ)
銀行振込 三菱東京UFJ銀行 飯田橋支店 (普)4515547 「日本聖公会」(ニッポンセイコウカイ)

憶え続けること・ 自分が忘れないで生活すること

松村 豊

東京教区ははじめ全国の教会、信徒、学校からのボランティアや訪問、献金など様々な形でこの4年の活動を支えていただきました。ありがとうございます。まだまだ終わりは見えませんが、日本聖公会挙げての支援活動が、ここまで無事故であったことに事務局として安堵し感謝しております。

4年前、被災地の惨状を目にして思ったことを今も忘れられません。私たちは、身内や大切なものを亡くした時、誰でも深い悲しみに沈みます。そうした時、家族や友人の存在に支えられ、仕事に追われる日常で紛れることでもあります。慣れ親しんだ光景の中ですしずつ落ち着きを取り戻すこともあります。しかし被災地では、家も家族も仕事も地域生活も、全てを失った人が大勢います。先々に希望を持つなど困難なのです。生き残った方の途方もない壮絶な心情に、私たちが寄添うなどとても出来るはずないことを実感させられました。その一方で、この出来事や困難は、たとえ東北から離れた所に居ても、誰にでも起こりうることに。明日の我が身と想ったのです。人間は生涯さまざまな災禍に遭います。神様に生かされている私たちは、その都度

に直面する現実をどう生きるべきなのか考えさせられました。

4年が過ぎ、外からの支援団体の撤退も相次ぎ、また関心の薄れも否定できません。建物などが片付けられ、嵩上げや護岸など公共事業によって外形的には変化しました。まるで出来事そのものを隠してしまうかのような感じも受けます。一部では災害公営住宅への転居も始まっていますが、調査結果によれば、生活の復興の実感は1年前に比べてむしろ低下しています。復興格差、地域の分断、家族の離散も進んでいます。

災害とは複雑なものだと思えます。沿岸部の同じ地域であっても津波で甚大な被害を受けた所とそうでない所とがはっきり分かれていることには驚くばかりです。また、原発事故で今も放射能災禍を受け続けている地域では時間が止まったままです。そして、被害と殆ど無関係の地域もあります。こうした被災状況の違いからか、東北域内でさえ、深刻な事態への関心には大きな差があります。また、震災前からあった人口流出や脆弱な地域経済、高齢化などの課題が顕在化し深刻さは増えています。

そうした中で、これから私たちに出来ることは何でしょう。これまで行なってきた「被災者を憶え続ける」た

めに祈る、現地を訪ねる、被災した方と現地や東京で直接関わることなどは大きな力です。もう一つの視点は、直接被災していない者こそが負うべき務めとして「あの日思ったことを忘れないう。その為に自分の日常を見直して変える勇気を持ち続ける努力」だと思えます。

震災以降、被害に遭わなかった多くの人々が、これまで享受してきた快適な生活を顧み、生き方や価値観を変える必要を思い知らされたと言われています。日本聖公会も総会で生活スタイルの見直しを表明しています。4年前に思ったことは、今どうなのでしょう。私たちは、顕著な事故や災害における被災者に思いを寄せますが、平素、隣りで悩む人、そこに在る他者の困難に行動できなければいけないと改めて気づかされます。被災者を憶え続けようと思いを巡らす今、自らの平素における他者への関心を顧みる時でもあるのではないのでしょうか。

今、福島で思うこと

福島聖ステパノ教会 司祭 八木 正言

震災と原発事故から4年が経ちました。ただ、私自身は福島市民となつて1年、まだまだ福島のことを語れる立場にはないと自覚しています。

たとえば人口の問題。よく「福島か

ら県外に避難した方はどれくらい？」と聞かれます。正直に「約4万7千人の人が今も避難して（させられて）います」と応えると、「人口減少が進んでしまいましたね」と返ってきます。確かにそういう見方もあるのかも知れませんが、福島にあつての人口減少の要因はむしろ少子高齢化の方が深刻であることを最近知りました。

あるいは、「震災から4年を経ても、今も除染作業は継続中です」「住宅街や道路はともかく、山など自然環境については除染作業は進んでいません」などと話す



と、「山には近づかない方がいいんですけどね」などと返答されます。これについても、その印象は間違いでないにしても、さらに言葉を継げば「福島は依然アブナイの？」になるのだろう、そんな偏見をもつたりもします。つまり、福島での日常生活において課題だと思っていることを口にすると、それが震災や原発事故と直接には結びつかないことでも関連づけられてしま

うこと、あるいは「福島」被災したアブナイところ」との土台に立つて聴かれてしまうことがあるのです。それが福島を語ることを躊躇させる理由です。ただ、だから沈黙を守りたいというわけではありません。必要以上に言葉の難しさを思わされる『福島の今』がある、そう感じているという話です。

5千人もの人の食事をどうやって調達するのかとイエスは問われました（ヨハネ6：4～15）。食糧調達という点ではイエスと弟子たちは一致していましたが、その方法においては意見が異なっていました。群衆に食糧を確保させるには、食糧のあるところに移る（買い求めに行く）しかないと考えた弟子たちと、限られた食糧しかない「ここ」こそが食糧の供給される場所だとされたイエスの違いです。イエスは「こ

こで」、そして「あなたがた自身で」の解決に励め、「私が共にいるのだから」、そう言われたのだと思つたのです。「ここ」が、「今」が、あなたの生きる場所であり、神と共に歩むために与えられた現実なのだ。

「今」、「福島」で、イエスと共に生きる私たちをお覚えたいただくこと、これからも信仰の友としての歩みをご一緒していただくことを願っています。

嘩が始まるわ、泥酔者はたくさんいるわで怖い思いもしました。またある人から裏の世界の話聞く機会があり、やっぱり現実は大変なのだ実感しました。

そしてみんなでそれらの体験を持ち寄り代祷形式の式文を作りました。

それでグループごとの発表があるのですが、他のグループの礼拝学的・神学的なものに対して、私達のグループは浮いているわけです。塚田先生は苦虫を噛み潰したような顔をされ、竹田校長、速水先生はニヤニヤ笑っていらっしやいました。その時、お祈りというのは人が生きている現実・命の営みを取り入れることが大切だと学びました。

それ以来、綺麗事ではなく、神様に感謝も悔い改めも懺悔も本音でぶつかれば、こちらの思い通りに叶うかどうかは別としても必ず聴いてくださると信じています。

ー おばあさまがお茶をされていた関係で先生もお茶に親しんでおられるそうですね。その教えの中に【形だけをつくってもそこに心が籠っていないければ何の意味もない】とあるそうですが、形と心のバ

ランスについて先生はどう思われますか？

高橋 祖母は私が5歳の時から手を引いてお茶を習いに連れて行きました。先生はとても厳しい方でちよつと髪に手をやっても直ぐに洗いに行くようにとか、「指輪は外しなさい」言われるほど、人様にお出しするもの、大切なものの扱いについての、その思いや気持ちを表すことを大切にされています。また【お茶をたてる順番を知っていること】と【お茶を知っていること】は違うことも教えられました。その頃は意味がよくわかりませんでした。今では【神様を知っていること】と【神様について知っていること】は違うのだとお茶とキリスト教が結びつきました。

お茶は小さな頃から意味もわからずに動きを体で覚えしました。まず形からですが、そこにだんだん意味がついてきます。それで形と心が一つになってきます。司式も心がそこにきちんと籠れば形は自ずときれいになり、形がきれいだと心は自ずと籠ると思います。【形か心か】ではなく【形も心も】である

ことは単にお茶や司式の問題ではなく、世の中のいろいろなジャンルの方を見ても教わる必要があるように、その人の生きる姿勢ではないでしょうか。

ー 先生の聖書の授業でこれだけは伝えたいという、メッセージは何でしょう

高橋 今は生徒たちに「キリスト教は命の宗教だ。生きて嬉しいこともあるし、『こんな私なんてもういやだ』と思うことはもちろんあるけれど、命を丁寧に生きる、そしてできれば私の命だけではなく私達の命というくくりで命を丁寧に生きていこう」ということを自分に言い聞かせながら話しています。それがキリスト教教育の柱だと思うからです。



「司祭のいのち」

『マルタとマリア』

イエスの世界の女性たち』

山口里子著

新教出版社・2004年刊

司祭 神崎和子

この本は、ヨハネ福音書にあるマルタとマリアの話を、フェミニストの視点から再解釈を試みるものである。

古代の世界では、伝承は語り継がれていました。聖書の内容が記

述される前も、伝承は口伝で語り伝えられていました。



「あなたが世に來られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております」(11・27)というマルタによる信仰告白と、さらにマリアによるイエスへの油注ぎ(12・3)は、極めて早い段階から、信仰告白が女性によって行われていたことを示すものに他ならない、と著者は訴えるのです。

一握りのエリート男性たちの書物になっていった、と著者は考えます。そして庶民の女性たちが口頭で語り伝えていた豊かさに、もつと肉薄する必要があると主張します。

例えばヨハネによる福音書11章1節から12章11節では、

福音記者ヨハネは、イエスがラザロを甦らせるという究極の「しるし」に焦点をあてています。しかしもともと語り伝えられていた伝承によれば、このラザロの復活物語の重点は、女性たちが、イエスこそメシアであると告白している点にある、と著者は主張するのです。

歴史的背景や状況を鑑み、歴史の想像力を膨らませてマルタとマリアの話を読むと、これまで気づけなかった聖書の豊かさに出会います。

モニカ会から感謝をこめて

常任幹事 奥山 尚



日頃の皆様からの物心両面にわたるご支援に、深く感謝申し上げます。現在東京教区からは、聖公会神学院で聖職候補生高柳章江さん、同志願者として大和孝明さんが学びを深めていらっしゃいます。

ご承知の通りモニカ会の名称に由来する聖モニカはその息子アウグステイヌスの反抗的性格に悩まされ、深い嘆き涙の中に在りながら、根気強い祈りと霊的苦悩の末に、彼をキリスト教の信仰に導き、その聖アウグステイヌスは古代キリスト教の神学者として思想的影響を広く世界全体に及ぼしました。

こうした聖モニカの神様

トする決意が必要です。教会

全体が一つの身体として一致して、支え一緒に歩んでいかなければなりません。

昨年後半から年初まで、北海道教区から聖公会神学院に昨年

入学した上平聖更職候補生

が、当教会に主日実習に

来て下さいました

が、ご本人の奨励も含め礼拝がさら

に豊かなものとされたことを感謝しています。少し本稿の趣旨とはずれるかもしれませんが、東京教区モニカ会の果たす役割としては、他教区との積極的関わりもあつてはいいのではないか

とも思っています。今東京教区は、大畑主教の諮問を受け教区再編成準備室が中心になりその準備を進めています。アングリカン・コミュニオンの宣

とも思っています。

モニカ会に捧げられる皆さまからの献金の主な支出は神学生の図書費です。

この図書費について、今年2月のモニカ会幹事会の後、神学生の

大和さんを捕まえて、どのように利用されているかお尋ねしてみました。用途は大きく分けて2種類、基本書籍と自分にとって刺激を与えてくれる本をかうようにしています

とのことでした（特に後者は指導教授と一緒に講読することで学びがとて深まったようで、大きな瞳を輝かせてその喜びをお話し下さいました）。

神学校での勉強で必要になるものは書物です。神学生は教科書の他に、将来教会奉仕の現場に出る日に備え基本的な書物を集めねばなりません。キリスト教の本と一口に言っても、聖書



2014年度神学院入学式

教理解「宣教の5指標」に基づいて、東京教区宣教方針の実行の柱を立てて行かなければなりません。モニカ会が5指標にどのように関わっていくか練り上げて行く上で、今後

（聖パウロ教会信徒

本と一口に言っても、聖書

神学院からこんにちは

学、神学、歴史、文化、現代的な様々な課題（他宗教・他宗派との対話、差別問題、心の問題……）と実に奥深く多岐にわたります。

日本ではキリスト教の本は読者が少ないため、普通の書籍と違って単価の高いものがほとんどです（事典類は1万円を軽く超えますし、単行本では3千円以上は当たり前前です）。このような現状で、神学生を物的に支えるのが、モニカ会からの図書費なのです。

良い書物、良い言葉との出会いが神学生の心を刺激し、豊かに育む手助けをします。種となって蒔かれた支援が、いつの日か礼拝の中で語られる御言葉となって、私たちの心に大きな喜びとなって注がれるのです。その日を待ち望みつつ、皆様には変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（立教諸聖徒礼拝堂信徒）

2年生になりました！

セシリア高柳 章江



神学院は4月13日から授業が始まりました。

私にとつては2年目という「慣れ」の中で授業が始まりましたが、1週間の流れがわかると、いろいろなことが見えてきました。

まず、2年生での学びは、1年生のときと比べると、だいぶ内容が濃くなりました。1年生のときは課題に追われて終わった、つまり与えられたことをこなせば良かったのですが、2年生になると自主勉強が求められるような印象を持ちました。

2年目の「余裕」から生まれた時間をどのように「自主勉強」に変換していくか。自分を律する、という新たな課題を抱えて今年度も学びを深めていきたいと思えます。

主に教会実習に行くといかに神学生が信徒の皆様を支えられているのかを実感します。皆様の日頃のお支えに心から感謝します。

洗礼者ヨハネ大和 孝明



聖公会神学院の新学期は2名の新入生を迎え、総計6名で始めました。

2年生になると、授業内容はさらに難しくなり、自分で主体的に文献にあたって調べ、報告する機会が増えてきました。中でも私は特に、ヘブライ語や教理学の授業を楽しみにしています。神学は学べば学ぶほど奥が深いです。生活に関しては、散歩や適度な運動を加え、健康管理に気をつけています。

新年度の大きな変化として、4月から日暮里の神愛教会が実習先となり、新たに伺うことになりました。

これまであまりご縁のなかった下町グループの諸教会。まずはその地域を歩き回り、人と出会うことを大切にしていきたいと思っています。皆様とお会いし、御一緒に祈る機会を楽しみにしています。

いつもお支えいただき、本当にありがとうございます。

《信徒リレーエッセイ》

大齋節は礼拝と祈り

東京聖十字教会

田中 武晴

今年の大齋節では「多くの礼拝に出席する」、「祈りの時を多く持つようにする」と心がけました。

わが聖十字教会で毎週木曜日夜に行われた『十字架の道行き』は、昨年に続くプログラム。復活前主日の福音書マルコ伝15章「十字架の道行き」の箇所は、14留の聖画を深く見つめたためでしょうか。主イエスを見つめる兵士、役人、民衆、そしてその人達のどよめきなどが絵解きのように伝わってきました。

3月7日にナザレ修道院で開かれた『山手教会G大齋静想会』では「日常の喧騒から離れて、静かに黙想し、ご自分を見つめ直してみませんか」の呼びかけ通り、まさに然りの環境の下での「礼拝・講話・沈黙・黙想」の時が持て、出席して良かったと感じました。クリスチャンとして進むパワーを頂いた感じでお世話になった方々にお礼申し上げます。



パンを弟子から人々へ手渡すキリスト（11世紀初頭の写本の挿絵）

2015年度東京教区

中高生世代キャンプテーマ

『大事なものって、なんすかね…』

私たちは、目に見えるもの見えないもの、たくさんの人や物に囲まれて生活しています。毎日を過ごす中で、気が付いたらそれらが当たり前になってしまっていることってありませんか？

当たり前のことも実は当たり前じゃない。今年の中高生世代キャンプは、そんな当たり前の毎日から離れて、みんなで一緒に過ごしながら大事なものについて考える機会になることを目指しています。

『私たちにとって大事なもののって、なんすかね…』

今年も、夏の中高生世代キャンプを実施します。場所は昨年度と同様、群馬県利根郡にある日本バイブルホームです。

前述したとおり、今年のテーマは『大事なものって、なんすかね…』ということで、三泊四日の教會的共同生活を送る中で、それぞれにとつての『大事なもの』について皆で一緒に考えてみる機会となることを目指

し、準備を進めています。

間もなく、参加者募集を開始します。各教会・礼拝堂へお知らせをお送りします。また、7月4日(土)に説明会を予定しております。保護者の方もご参加いただけます。こちらも追ってお知らせをお送りします。

毎週教会へ行っている人も、最近行っていない人も、行ったことないけど少し興味がある人も、今年度13〜18歳の方は皆歓迎します。皆さんの参加応募をお待ちしております。

日程：8月20日(木)〜23日(日) 場所：日本バイブルホーム

(群馬県利根郡みなかみ町) 主催：東京教区・中高生世代キャンプ準備会 問合せ：tokyo.camp2013@gmail.com

日本聖公会初の

韓国語聖餐式

4月12日、牛込聖公会聖バルナバ教会で、はじめて韓国語の聖餐式がささげられました。この日から、韓国語の聖餐式は聖バルナバ教会の主日の第3聖餐式(午後2時開始)として守られることとなります。ソウル

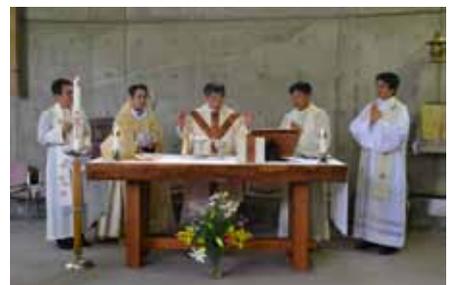


教区からは金根祥(キム・グンサン) 主教(大韓聖公会首席主教、ソウル教区主教)、金成洙(キム・ソンス) 主教(前大韓聖公会首席主教)、柳時京(ユ・シギョン) 司祭(大韓聖公会管区事務所総主事)ら8人が参加し、参加者は合わせて46人でした。

日本聖公会で韓国語の礼拝が定時に行われたことはありません。100万人以上の韓国人が住む日本で、韓国語の主日礼拝が行われていなかったのです。日本聖公会が情熱的な信仰をもった韓国人共同体をもたないのは非常に残念なことです。日本聖公会の信仰のかたちを見直す機会を逃

してきかと思われからです。

この日説教に立った東京教区の大畑喜道主教は、「日韓聖公会の関係が30周年を超え、これからまた次の10年を準備する時期に、東京教区で韓国語の聖餐式を守れるようになったのは神様の祝福です。これから始まる韓国語聖餐式は、今は小さな群ですが、両国の聖公会信徒の関心とお祈り中で大きな結果を得るようになるはずです」と語られました。



とと共に生きる活力の源となることを願います。 聖バルナバ教会副牧師 司祭 池星熙(ジ・ソンヒ)

次回夏号 7月26日発行予定

外国で生きるのは楽しくも

ちょっと聖書、ときどきユーモア (十九)

1. 貧しい人は幸い

牧師「イエスさまは“貧しい人は幸いである”といました」 子ども「はい先生、それなら私のうちは、まちがなくて幸いです」

2. 狭い門より

信徒A「イエスさまは“狭い門から入りなさい”と言うけど、近頃の教会はそれ以上だよ」 信徒B「どういうこと」 信徒A「最近では牧師不足だから、日曜日以外、教会の門は狭いどころか、閉まっているからね」

3. U26世代

信徒1「聖公会にU26(ユージロー)世代という26才以下の青年の集まりがあるよね」 信徒2「そう、でも私もその世代よ」 信徒1「えっ、悪いけどどうみてもその年代には見えないけど」 信徒2「なに言ってるの、私たちこそ、本当の裕次郎世代ってことよ」